

ドイツにおける日本語教科書にみられる 「られる」表現について

柳 武 司

1. はじめに

旧来から用いられている文法カテゴリーの多くは、言語間で均質的に用いられるものと考えられているが、これは英語とドイツ語のように系統的な近縁性がある言語間に見られる特徴である。これに対してドイツ語と日本語の様に系統的な近似性がない言語間の文法カテゴリーには、異質な振る舞いをする用法を同じ文法カテゴリーとして扱われている場合が見られる。卑近な例として「形容詞」がよく取り上げられ、インドゲルマン語族では名詞に近い語類に分類され、日本語では現在形に限り動詞を省くことができることで動詞に近い語類として扱われている。品詞は類似する文法的な振る舞いをする語類をまとめる枠組みであるが、統語的枠組みに於いてもドイツ語と日本語間には差異が見られる。今回の調査では、品詞を含む大きなカテゴリーを扱うのではなく、語学教育上必要と思われる文法項目の一つに限定して分析し、その差異について考察したい。

2. 日独間文法対照調査及び曖昧性

調査対象として選択した文法項目は、ドイツ語文法では „Passiv“, 日本語文法で一般的に受動とされる「られる」を用いる表現を選択した。日本語の「られる」による表現は、受動に限らず可能表現など他の機能も有しており、ドイツに於ける日本語教育の教科書などを参考にして、„Passiv“ と比べて異質なものを語学教育的な観点としてどの様に扱い、提示しているのかを確認し、その方法について考察したい。

2.1. ドイツ語文法に於ける „Passiv“ と日本語文法に於ける「受動」

ドイツ語文法における „Passiv“ 「受動」は、一般に以下の様に規定され

ている。¹⁾

Passivformen werden mit einem Passivhilfsverb (werden, sein, bekommen) und dem Partizip II eines Vollverbs gebildet. Beispiele (im Infinitiv) sind gefunden werden (werden-Passiv von finden), erzählt bekommen (bekommen-Passiv von erzählen) und geöffnet sein (sein-Passiv von öffnen).

「受動形式は、 werden, sein, bekommen といった受動の助動詞及び本動詞の過去分詞によって形成される。不定詞での例としては、 finden の werden 受動になる gefunden werden, erzählen の bekommen 受動になる erzählt bekommen, öffnen の sein 受動である geöffnet sein がある。」

この記述の後、文法的に対立するのは „Aktiv“ 「能動」であることを述べている。

日本語文法での「受動」の規定としては、松村の「受動」の項を参照すると²⁾、3分類されている。

(1) 直接の利害を表すもの。これはある動作の影響力が本来ある有情物(人あるいはその他の動物)に向かうものである場合に、その有情物を表す名詞(句)を主語とする表現に用いられるものである。

イ) 有情物が動作の直接の対象。

「彼は皆から愛される」

ロ) 有情物の所有者、近親者、身体の一部などが、他動的な動作の影響を受けるもの。

「どろぼうにさいふをとられる」

ハ) 有情物と密接な関係にあるもの(有情物)の動作が、その有情物に本来的に深刻な被害をもたらすものであるもの。

「親が子に死なれる」

(2) 間接の利害を表すもの。これはある動作の影響力が本来的にある有情物に向かっていない場合に、その動作の発現をその有情物にとっての間接の被害(「はた迷惑」)と認めて表現する場合に用いるものである。

「彼は子供に泣かれて一晩中ねむれなかった」

(3) いわゆる非情の受身。これは本来の日本語ではほとんど用いられなかったものであって、欧文の翻訳文の影響でさかんに行われるようになったものである。他動詞の目的語となる非情物(有情物以外のもの)を主語

とする表現に用いる。

「犯罪が当局によって摘発される」

『日本文法大辞典』による「受動」の記述は、動作が直接的あるいは間接的に利害関係にある有情物に受ける影響力を「られる」を用いて表すのが本来の日本語であり、(3)は本来の日本語ではなく、翻訳の必要性から生じたものとして区別されている。日本語への翻訳事情とは対照的に、(2) 間接の利害の場合、他動詞の被動対象を主語にする表現ではなく、被動対象はもとより、様々な動詞と共に生じる際の人間の心理的な影響を被る場合も含む表現であり、この表現法はドイツ語に限らず英語や中国語でも動詞を受動形式にして表せるものではない。この様に日独間で異なる文法的機能を持つ「受動」あるいは „Passiv“ がどの様にドイツに於ける日本語教科書で扱っているのかを確認する。

2.2. ドイツに於ける日本語教科書

調査対象として2種類の日本語教科書を確認した。一つは、ミュンヘン大学の日本語講座で使用している教科書 „Japanisch im Sauseschritt“³⁾ であり、内容としては日本に於ける日常生活にとって実践的な内容となっており、受動の文法的な観点からの記述は少ない。二つ目は、デュースブルク - エッセン大学で使用されている教科書 „intensivkurs japanisch - an der Universität Duisburg-Essen Japanischkurs“ では、文法的な観点から受動に関して多くの記述があり、この教科書記述を調査対象としたい。⁴⁾

Passiv (Ukemikei)

Im Japanischen gibt es drei Anwendungsmöglichkeiten des Passivs. Zwei davon entsprechen etwa dem, was wir aus europäischen Grammatiken vom Passiv gewöhnt sind, z.B.

Ich kaufe ein Buch -> Das Buch wird von mir gekauft.

So eine Konstruktion ist auch im Japanischen ohne weiteres möglich. Das „von“ wird im Japanischen ni, kara (kann ni ersetzen, wenn in dem Satz schon mehrere ni vorkommen) oder ni yotte (bei Verben der Schöpfung, etwa „Buch schreiben“, „Bild malen“) .

Zum anderen gibt es noch eine Form, die auch „Passiv“ heißt und grammatikalisch auch so (ähnlich) aussieht, aber eine ganz andere Bedeutung hat und sich auch praktisch nicht wörtlich übersetzen läßt:jemandem passiert etwas durch eine andere Person. Dazu später mehr, zunächst die Konjugationsformen:

-uru wird -areru.

「受動（受身形）」

日本語には、受動の3つの使用可能性が存在する。それらのうち2つは、受動についてのヨーロッパの文法に馴染みのあるものにほぼ相当する。

例：『私は本を一冊買う。』→『その本は私に買われる。』

その様な構造は日本語においても問題なく可能である。ドイツ語の „von“ は、日本語で「に」「(既に「に」が多用された場合に「に」の代わりに)から」あるいは「(例えば『本を書く』『絵を描く』など創作の動詞の場合)によって」になる。

他方、これも「受動」と呼ばれ、文法的にも受け身に見えるが、しかし全く異なる意味を持ち、実際に言葉通り翻訳もできない一つの形式が存在する。それは、ある人に他者による何らかの事柄が生じる、というものである。それについては後ほど説明するとして、差し当たりは、動詞語尾 „-uru“ が „-areru“ になる。』

文法的に説明する観点としては、用例として、ドイツ語 „essen“ について「食べる」→「食べられる」などの語形変化を示し、語形として能動から受動になる場合に「られる」という語形的側面を扱っている。三つの用法を挙げると、1. 普通の受動（先生は私を怒る→私は先生に怒られる）、2. 一般的な表現（日本で漢字が使われています）、3. 迷惑の受け身（私は家内に車を売られました）と記述されている。Dudenの記述に見られる様なドイツ語における „Passiv“ が均質的に扱える文法とは異なり、日本語の「られる」という一つの形式には、複数の異なる意味が含まれるため、三つに分類して受動を説明している。この分類は日本語文法の松村の記述と比較すると、意味的な分類の類似性が見出され、日本語文法における一般的な分類区分を採用しているように思われる。⁵⁾

日本語の教科書の記述量を確認すると、この分類中「迷惑の受け身」が最も多く、他二つの分類が数行であるのに対して、その約3倍に渡る記述量

Duisburg-Essen の教科書	松村の記述
1. 普通の受動	(1) 直接の利害を表すもの
2. 一般的な表現	(3) いわゆる非情の受身
3. 迷惑の受け身	(2) 間接の利害を表すもの

があり、人間が直接関与する表現に関しては、ドイツ語の与格を加えることで文が成立するが、話し手が動詞の動作に直接的に関連しない事柄に関しては直接的な訳が成立しない。以下は、Duisburg-Essen の教科書による記述である。

松村(1996)の(1)ハ)に該当する人間が関与する「迷惑の受身」:

Nehmen wir an, die Mutter besitzt eine Uhr, die von ihrem Kind kaputt gemacht wurde. Okaasan ha kodomo ni tokei wo kowasaremashita - Der Mutter wurde von ihrem Kind die Uhr kaputt gemacht.

(母親が時計を持っていて、それが子供に壊された場合、「お母さんは子供に時計を壊されました」という表現をドイツ語の用例としては与格 „der Mutter“ を使用することで説明している。)

松村(1996)の(2)に該当する話し手が直接事柄に関与しない「迷惑の受身」:

Watashi ha ame ni furareru. Stück für Stück aufgedrösel: Ame ga furu heißt Es regnet (Regen fällt herunter). Betroffener bin ich (watashi ha), handelnd ist der Regen (ame ni). Sinngemäß bedeutet dieser Satz ungefähr: Ich wurde naßgeregnet.

(「私は雨に降られる」という表現は、しとしとと雨が落ちてきて、自分が濡れてしまうことを表すことである、と説明している。)

なお、日本語の「られる」による表現は受動だけではなく、können I が「できる」に対して、können II として「食べる」が「食べられる」となることが記述され、可能的表現にも用いられることも記されていることに加え、「食べれる」という五段活用の可能態による表現も言及している。

2.3. 語学教育に関する今後必要となる記述に関する考察

「られる」という一つの語形であるが、異なる複数の意味を有している表現に関して、ドイツに於ける日本語教育用教科書がどのように意味の違いを説明しているのか、ここまで確認してきた。ここから今後必要になると推測される以下の4点を導き出した。

1) 「非情の受け身」の心理的ニュアンスを説明する記述の必要性

日本語の受動表現は、動作を被ることだけではなく、心理的な影響を被ること全般にも用いられることを明示すること。

2) 動作を被る受動と可能を表す表現の境界や語法の選択に関する説明

日本語の用例を列記するだけでなく、それらを区別する指標の提示。

3) 丁寧を表す「られる」の記述

「山田さんが鈴木さんに英語を教えられる」などといった場合、受動と可能、丁寧といった三つの可能性があり得ること。

4) 受動表現の訳語として「られる」だけではなく、肯定的な表現として「もらう」の記述

例えば「父親が子供を褒める」の受動表現としては、「子供が父親に褒められる」と「…褒めてもらう」の二つの可能性があり、後者はより肯定的なニュアンスを含むこと。

また、4)の「もらう」に関しては、「もらう」が肯定的な受動ではなく、sollenを用いて「父親に私の嫌いなものを食べてもらう」といった表現もあり、統語構造上異なるのに同じ語形で表され、音声面だけでは捉えきれない曖昧性を含んでいる。この他にも、完了を「して/やってしまった」「し終えた」など複数の表現の可能性がある。また、日本語には好みや嫌悪を表す評価を含む表現が多く、ドイツ語話者にとってなじみのないニュアンスが含まれることも述べる必要がある。

3. おわりに

日独間の表現の差異として、„Passiv“及び「られる」を取り上げ、文法書や教科書を確認しながら、表現が与える意味の同一性と差異を確認した。同一性としては、日独間で動詞の表す働きを被る表現がいずれの言語の受

動にもある。しかし、いわゆる「はた迷惑」の受動は日本語にしかない。また、ドイツ語の場合、述べる内容が客観的な動作そのものを被ることを表すのに対して、日本語の場合は表現内容に少なからず良い悪いの評価が入り易い。雄弁がよい欧米と違い、「沈黙は金雄弁は銀」と言われることもある日本語では、評価が入りやすいため、ドイツ語に比べて積極的な議論をする際に感情的な表現が入り込み易い言語と思われる。

参考文献

- Dudenredaktion (Hrsg.) : Das Bedeutungswörterbuch. Duden Band 10. 4. Aufl. Berlin 2010.
- Dudenredaktion (Hrsg.) : Die Grammatik. Duden Band 4. 8. Aufl. Berlin 2009.
- Dudenredaktion (Hrsg.) : Deutsches Universalwörterbuch. 5. Aufl. Mannheim 2003.
- Engel, U.: Deutsche Grammatik. Julius Groos. 2. Aufl. Heidelberg 1988.
- Helbig, G. / Buscha, J.: Deutsche Grammatik Ein Handbuch für den Ausländerunterricht. 7. Aufl. Leipzig 1996. (現代ドイツ文法の解説：西本美彦他訳. 同学社. 1994.)
- Hentschel, E./Weydt, H.: Handbuch der deutschen Grammatik. 2. Aufl. Berlin 1994.
- 川村大：ラル形述語文の研究 くろしお出版 2012.
- 川島淳夫他（編）：ドイツ言語学辞典 紀伊国屋書店 1994.
- 国松孝二他（編）：独和大辞典 第2版 小学館 2000.
- 松村明（編）：日本文法大辞典 12版 明治書院 1996.
- 柳武司：受動表現に関する日独間翻訳のために、『リエンコイス』第49号 2015. 151～162頁

注

- 1) Duden (2009) 4.5.2 Diathese:Aktiv, Passiv und Verwandtes の記述参照。
- 2) 松村 (1996) 「受動」の項参照。今回の調査と関連のない記述を省く。
- 3) Japanisch im Sauseschritt. Doitsu Center Ltd. 2006.
- 4) https://www.uni-due.de/~hy0382/fileadmin/hilfsmittel/semester1/Sem_1_Begleitmaterial.pdf (2018年8月5日アクセス)。
- 5) 上述した文献及び教科書から次頁の対照表を作成。